

# Elizabeth Closs Traugott and Graeme Trousdale: *Constructionalization and Constructional Changes*

Oxford: Oxford University Press, 2013. xvii + 278pp.

---

石崎保明

---

## 1. はじめに

構文文法理論（以下CG）において、構文は一般に「形式と意味の慣習的なペア」と定義され、個々の構文が他の構文とネットワークを成すものと想定される。CGでは、また、実際の使用の場でヒトがもつ認知能力の作用により構文が形成・発達するという用法基盤モデル（以下UBM）が広く採用されている。このような言語観に基づき、これまでのCGは、主として現代語を研究対象として成果を重ねてきたが、通時的言語変化を説明する理論としてCGの適用可能性が本格的に議論されるようになったのは、おおよそ今世紀に入ってからである。本書は、CGに基づく通時的研究を牽引する2名による共著であり、構文(変)化に対する妥当な理論的枠組みを提示することをその目的としている。

## 2. 本書の概要

本書では、従来曖昧に議論されていた構文変化（constructional change, 以下CC）と構文化（constructionalization, 以下Cxzn）を区別する。CCはすでに存在している構文の特徴に影響を与える変化であり、Cxznは新しい形式と意味とのペアを生み出す（つまり新たな接点（node）としてネットワークが形成される）変化である。Cxznは形式と意味の両方における新たな分析（neoanalysis, 従来の「再分析（reanalysis）」におおむね相当）を必要とし、どちらかのみの変化はCCに分類される。Cxznの前には必ずCCがあり（PreCxzn CC）、Cxzn

の後にもCCが起こりうる (PostCxzn CC)。Cxznの見極めには、意味だけでなく形式の変化がテキスト上で観察可能とななければならない。例えば、元々は物体 (しばしば木の破片) を表しその後部分詞となった *a lot of* N(oun) から数量詞へのCxznは、テキスト内で (*a*) *lot* ではなく *of* に後続するNと数が一致する用例が観察されてはじめて認定が可能となる (e.g. *a lot of goods is* → *a lot of goods to sell, and you wish to purchase them*)。

Cxzn・CCの分析に必要な抽象的記述レベルとして、本書はスキーマ (schema), 下位スキーマ (subschema), および、話者が発する *many* や *a lot of* といった実例 (construct) から抽出される、スキーマとしては最も具体性が高いマイクロ構文 (micro-construction), の3種類を提案している。例えば、現代英語の数量詞構文は、時代を経て、以下の階層構造を持つに至っている。

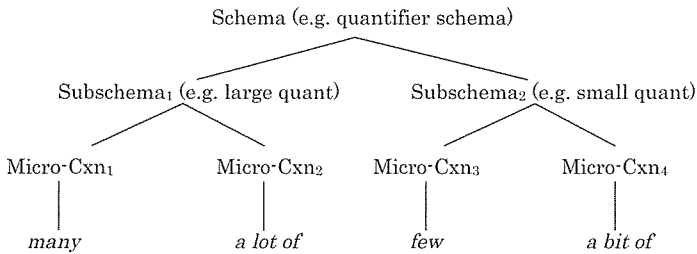


図1：現代英語における英語数量詞構文の階層構造

2章では、UBMに基づく言語変化の研究で鍵となる、構文間のネットワークの発達を論じている。ネットワークは、個人の脳内にも、ある特定の時代における言語共同体の中にも、通時変化の中にも存在する。構文の定着や変化に関わるネットワークが活性化する要因の1つとして、本書では、過去における使用がその後の意味や形式の使用に影響を与えるというプライミング (priming) の重要性を指摘している。プライミングは、頻繁に見聞きする表現が記憶に残りやすいといった単純なものではなく、構文 (形式と意味のペア) がある特定の文脈下で活性化され、それが形式と意味の結びつきをさらに強化していく、という点が重要である。一例として、*a deal of* は元々 *a good deal of* のように数量

形容詞と共起する場合が大半であり、*a deal of* が用いられる文脈では数量詞としての意味が活性化されていたことから、その意味が *deal* に及んで数量詞へと発達したと考えることもできる。このように、構文の変化はある‘局所的な’ネットワークの中で生じるため、その変化を誘発する先行文脈内でどのようなネットワークが活性化されている（いた）のかを詳細に検討する必要がある。本章の後半は、*may* 構文を事例に、通時的なネットワークの形成過程を CC・Cxzn との関連で論じている。

3章と4章では、変化の（プロセスではなく）結果として、関係や視点、直示性といった手続き的（procedural）な機能を持つに至る構文化（grammatical Cxzn, 以下 gCxzn）と、より具体的な意味を持つに至る構文化（lexical Cxzn, 以下 lCxzn）が扱われている。現象としての文文化・語彙化を理論的にどのように捉えるのかは CG の主要なトピックであるが、本書では、構文は図1でみた階層構造をなし、変化の結果として、ネットワーク内に新しい文法的要素として位置づけられると gCxzn, 新しい語彙的要素として位置づけられると lCxzn とみなされる。よって、Brinton and Traugott (2005) とは異なり、例えば通常の語形成のような漸進的通時変化を伴わない事例も lCxzn の事例になる。

CC・Cxzn の方向性はスキーマ性、生産性、合成性の3つの観点から捉えられ、gCxzn ではスキーマ性と生産性が増加するが合成性は減少し、lCxzn ではスキーマ性と生産性が増加する場合（e.g. [X-*dom*]）と減少する場合（e.g. *garlic* (OE: *gar + leac* (‘spear leek’))）があり、合成性については常に減少する。Brinton and Traugott (2005) によれば、「語彙化」はスキーマ性や生産性の減少を伴う通時変化であるが、本書が提案する CG では、例えば [X-*dom*] は手続き的機能ではなく指示的意味を増す変化であり、生産性の増加に伴い新たな（語彙的）スキーマを形成し、結果としてネットワークにおいて語彙的要素として位置づけられると分析される。

5章では、CG における文脈の役割が議論されている。従来文法化の初期段階には、（文法化された要素とその元となる要素の両義に解釈できる）曖昧な文脈の存在が不可欠とされていたが、何ら曖昧な文脈を伴わない *may* 構文のような例もあることから、本書では gCxzn における新分析に曖昧性は不要である

と述べている。本章の後半は [X-*dom*] や *a lot of*, *BE going to*などを事例として、それらが使用されている個々の文脈や関連表現との競合なども考慮に入れながら、構文がどのように、どの程度拡張していると分析できるのかを考察している。6章はまとめと今後の課題が簡潔に述べられている。

### 3. 評価と展望

「構文とは形式と意味のペアであり、それが使用とともに変化する」、と言っても、その構文が何をもって変化したと言えるのか、さらにはなぜ形式と意味にズレが生じるのか、といったことは、従来あまり語られることがなかった論点であり、これらの点について詳細な検討を行っている本書は高く評価できる。全体を通して新たな言語事実の発掘という点ではやや物足りない印象があるものの、それは本書が構文（変）化に対する包括的な理論的枠組みの提示に重きを置いているためであり、むしろ本書が契機となって、英語やそれ以外の言語における構文（変）化の研究が促進されることになろう。とりわけプライミングに基づくネットワークの活性化の通時的研究については、心理言語学や歴史語用論といった文脈の役割を重視する研究の成果も取り込みながら、大きな進展が期待される。

他方、本書が提案する枠組みで言語事実を発掘・説明する際に問題となりうるのは、変化の実態をどのように、どの程度提示すればよいのか、ということである。本書ではトークン頻度が言語要素の *unit status* を決めることの重要性は認めつつも、限られた歴史的言語資料の中で構文が定着するためにどの程度の頻度があればよいのかを測ることが困難であるとし、(生産性の指標となるタイプ頻度とは対照的に) トークン頻度に基づく分析に懐疑的である。しかしながら、Cxzn, すなわち形式と意味の双方の変化を判断するためには、OEDやMEDなどからの用例が一つあればそれで事が足りるというわけではなく、共時的な分布とその通時的な拡がりの観察があってはじめて、本書が主張する使用上の微小な変化 (*micro-step changes*) の実態が明らかになる。よって、とりわけ言語の通時的変化の実態を捉える場合、トークン頻度に基づく定量的分

析を過度に除外する必要はないと思われる。

別の問題として、本書では、定義上、語形成も  $C_{xz}n$  や  $CC$  の事例に含まれるが、語形成には品詞転換などのように、先行文脈に関係しない、話者の創意工夫 (innovation) により瞬時的にネットワークに位置づけられる変化もまた、構文 (変) 化の事例に含まれる。このため、本書では言語変化の漸進性 (gradualness) が繰り返し指摘されているものの、必ずしも本書が通時的言語変化のみを射程に置いているわけではないことには注意が必要であろう。

#### 4. おわりに

本書は形式と意味を等しく扱い、かつこれらペアの生成から変化までを捉えようとする野心作であるがゆえに、上述の問題に加えて、議論が拡散したり、込み入ったりする箇所も散見される。とはいえ、本書が描く構文観は、言語変化研究の新たな可能性を秘めており、今後の理論的進展が大いに期待される。

\*本稿は科学研究費補助金 (基盤研究 (C) : 課題番号 24520557 および 15K02624) による研究成果の一部である。

#### 参考文献

Brinton, Laurel J and Elizabeth Closs Traugott. 2005. *Lexicalization and Language Change*. Cambridge. Cambridge University Press.